SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

田中克志先生のご退職に寄せて (田中克志先生退職記念号)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 和夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007820

田中克志先生のご退職に寄せて

中　村　和　夫

静岡大学大学院法務研究科（法科大学院）の研究科長である田中克志先生は、平成26年3月末日をもって静岡大学を定年退職されることとなりました。

田中先生は、昭和23年4月、広島県において出生され、大阪府立豊中高等学校を卒業後、昭和47年4月岡山大学法文学部を卒業され、神戸大学大学院法学研究科修士課程に進学され、昭和53年1月同博士課程を修了されました。ただちに、昭和53年2月富山大学の経済学部助手として採用され、昭和55年12月に同助教授に昇進された後、昭和59年4月から静岡大学に人文学部助教授として赴任されました。その後、平成2年4月に同教授に昇進され、平成17年4月から静岡大学法科大学院教授に就任、平成21年4月からは法務研究科長を務められてきました。

田中先生は、神戸大学大学院において石田喜久夫先生のご薫陶を受けられ、学位論文「ドイツ民法典における担保法成立史」において法学博士号を取得されました。引き続き、ご研究の中心テーマとして「抵当権」を据えられ、とくにドイツにおける抵当権の歴史的発展過程の分析の研究を基礎にしながら、不良債権化した不動産担保融資の回収を促進した政策のなかにおける、抵当権の効力の強化・拡大という現実的課題に対して考察を進められ、その成果を『抵当権効力論』としてまとめられました。そのほか、民法領域に関して多数の著書・論文を発表されていますが、田中先生の研究姿勢は、たとえば高齢者生活保障に関する論文に代表されるように、常にわが国社会に生起する現実問題をいかに解決すべきかについて法学者として真摯に向き合い考察するという態度であり、これは我々も見習わなければならない姿勢であると思います。

つぎに、教育面においては、学部の担当時代から一貫して民法をご担当されてこられましたが、学部の担当の時点から、パンデグテン方式のカリキュラム体系を現実問題に合わせて解釈できるよう再編して教育するという方法をとってこられ、法科大学院の教育においてもこの方式が効果を発揮していることは、高く評価されるものであります。

さらに、静岡大学において法科大学院の立ち上げから、その中心として設置申請書

をまとめられ、設立後も、法科大学院の運営の中心として、とくにご定年前5年間は研究科長として、厳しい環境にさらされている法科大学院をめぐる状況のなかで、静岡大学法科大学院の継続的発展にご尽力をいただきました。

田中先生は、誰しもが認める温厚なお人柄で、その関西風なソフトな口調と相俟って、自ずからまわりを癒やすような雰囲気を醸し出しておりますが、困難な状況にもへこたれず何度でも立ち向かっていく姿勢は、同僚として感銘を受けたものです。田中先生がご定年を迎えられる中で、より厳しさを迎える静岡大学法科大学院の状況に対して、田中先生の静岡大学法科大学院に対して傾注されてこられたご努力を無にすることなく、今後ともその発展に向けて我々は力を注いでいきたいと思います。

最後に、田中先生は、ご定年後常葉大学法学部においてひきつづき教鞭をとられると伺っておりますが、くれぐれも健康にご留意されご研究を続けられることを切望いたします。